
第三者である ということ

SVA NGO海外事務所研修

プログラムを終えて

2011.08.10-09.09

立命館大学国際関係学部国際関係学科

国際文化理解コース 3回生 二瓶 明

【目次】

0. はじめに
1. NGO 海外事務所研修プログラム参加の経緯
2. 研修テーマ
3. 難民キャンプにおける将来への希望の調査
 - (1) 帰国の意志について
インタビュー結果①、見解①
 - (2) 第三国定住について
インタビュー結果②、見解②
4. 民族の意識に関して
 - (1) 難民キャンプインタビューより
 - (2) BPHWT 訪問より
5. おわりに

0. はじめに

私がこの研修プログラムを通して感じたのが、私は“第三者”なのだということである。それは、排他的でネガティブな意味合いとして感じたのではなく、難民・移民問題、政治的な課題、民族間の意識の違いなどビルマという国を取り巻くさまざまな事象に関して多様な視点が存在すること、そしてそのどれが正しくどれが間違っているということではなく、すべての視点に役割があるのだと気づくことができたということである。難民キャンプ訪問のみならず、メーソットでビルマからの移民へ支援を行う NGO やクリニック、国内避難民に医療や保健教育を提供する NGO の訪問、ジャーナリスト、在日ビルマ人、ライター、SVA 事務所のスタッフの方々とともに過ごす時間の中で、「いったい私はなぜここにいる、何ができるのだろうか？私の視点とは何で、どのような役割があるのだろうか？」と、自分自身と向き合う貴重な機会にもなった。以下で、今回の研修において私が設定したテーマに沿った調査結果、考察とともに、“第三者”という意味について私が感じたことを述べていきたいと思う。

1. 研修プログラム参加への経緯

私は、2011年2月、日本で難民申請をし民主化活動を行うビルマ人の方に同行し、メラウ難民キャンプを訪れた。その目的は、難民キャンプに生きる人々の生活環境や教育状況を知ること、そして必要物資をキャンプ内の学校に届けることであった。そもそも、ビルマ難民キャンプ、そしてビルマという国に関心を持ち始めたのは、私の大学の教授が個人的に難民キャンプ支援に関わっており、その活動について講義をしてくれたことがきっかけであった。それから、私自身も在日ビルマ人の民主化活動家の方と連絡を取り、直接お話を伺ったり、講演会などに顔を出していたが、やはり現地の様子、そこに生きる人々の思いを自分の目で見てそして聞いてみたいと感じていた。2月の難民キャンプ訪問は、こういった思いが実現したものであった。

しかし、キャンプ訪問後、ビルマ国内にいる国内避難民のキャンプを取材経験のあるジャーナリストの方や、様々な書籍などを読んでいた私は、何かもやもやとした気持ちがあった。その一つは、第三国定住についてである。2004年から欧米諸カ国を中心に始まった難民を自国に受け入れる第三国定住プログラムは、難民問題の一つの解決策と言われる。しかし、私の訪れたメラウキャンプ Section13 では、第三国定住という言葉を目にするのはほとんどなく、国際社会で注目され取り上げられるこのシステムが、現実として、難民キャンプに住む人々に本当に有益であるのか、彼らがどれほど望んでいるものなのか、どのように感じているものなのか全く分からずにいたのである。もうひとつは、民族の意識についてである。私は、タイ・ビルマ国境にある難民キャンプを、ビルマという国から逃れてきた人々のキャンプという意味合いで“ビルマ難民キャンプ”と呼んでいた。しかし、“カレン難民キャンプ”と一定の民族に特定して呼ぶこともしばしばある。確かに、キャンプ設立の背景としても、民族の割合としてもその多数はカレン民族である。一方で、

ビルマやその他少数民族もともにキャンプに暮らしている。呼び名について議論したいのではないが、やはり、その呼び名にその人の意思が込められている場合はしばしばある。そして、そもそもビルマには、130 を超える民族が存在しており、それぞれが自民族に誇りを持ち、文化を継承してきた歴史がある。これを考えずして難民問題に取り組むことは不可能であろう。キャンプに生きる彼らは、自民族に対してそして他民族に対して、どのような意識を持っているのだろうか。また、私はどの立場から難民キャンプ、そしてビルマの抱える問題にアプローチしていけば良いのか。そこで、民族に関する意識について知らなくてはならないと感じていたのである。

私はこうした思いから、今後も難民キャンプの支援を続けていくのにあたって、主に将来への希望に関して複数の難民キャンプを観察し多くのキャンプ住民の声を聞くとともに、民族の意識に関してより広い視点を獲得するためにこの研修プログラムへの参加を決めた。

2. 研修テーマ

私はこの研修プログラムに参加するにあたって、大きく「難民キャンプにおける将来への希望の調査」をテーマに設定した。これは、第三国定住に関する難民キャンプ住民の意向を探るとともに、帰国に対してどのような意識を持っているのかを調査する意図を持っている。この調査は、難民キャンプでのインタビューという手段をとったが、テーマに沿った質問項目の他に、対象者によって民族の意識についてや SVA の図書館についてなども同時に聞くこととした。

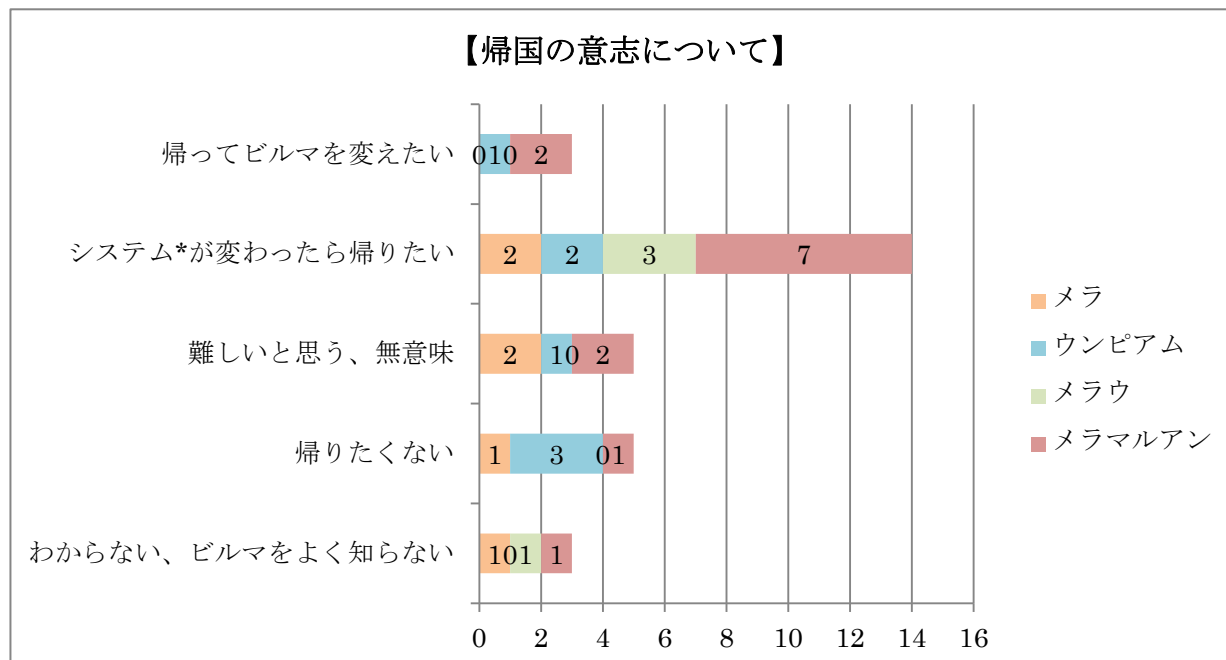
◆主なインタビュー項目

- ・名前、年齢、民族、宗教
- ・キャンプ以前はどこに住んでいたか、職業は何だったか、生活の様子はどうだったか
- ・いつキャンプに来たのか、なぜキャンプに来たのか
- ・キャンプでの生活はどうか、問題はあるか、要望はあるか
- ・第三国定住プログラムを知っているか、どのように思うのか
- ・ビルマに帰りたいと思うか

3. 難民キャンプにおける将来への希望の調査

(1) 帰国の意志について

〈インタビュー結果①〉



*システムとは：政治的、社会的システムのこと。具体的に挙げられたのは、民主的な国家体制、機会や言論の自由といったさまざまな権利が少数民族にも平等に認められ、争いのない平和な社会であること、など。

これは、“あなたはビルマに帰りたいと思うか”という問いに対して得られた回答である。まず、突出して多いのは「システムが変わったら帰りたい」という意見であった。「今は恐ろしくてとてもじゃないけれど帰りたくない」と答えたが、やはり自分のルーツはビルマ（カレン州）にあると語ってくれる人もいた。しかし、「もちろん国が変わったら帰りたいけど、何百年あっても足りない」「あの国が変わるなんて到底信じられない」という声があるのも確かであった。自分の村が国軍により焼かれなくなってしまった、肉親を殺されたという人々からは、帰っても無意味だという声もあった。そして、注目したいのは、ビルマを知らないという回答である。難民キャンプが形成され始めてもう30年近くの年月が経とうとしている。幼い頃に両親や親戚に連れられてキャンプへ逃げてきた、ジャングルで生まれ教育を受けるためにキャンプへ来た、キャンプで生まれた…そうした若者、子どもたちが数多く存在している。

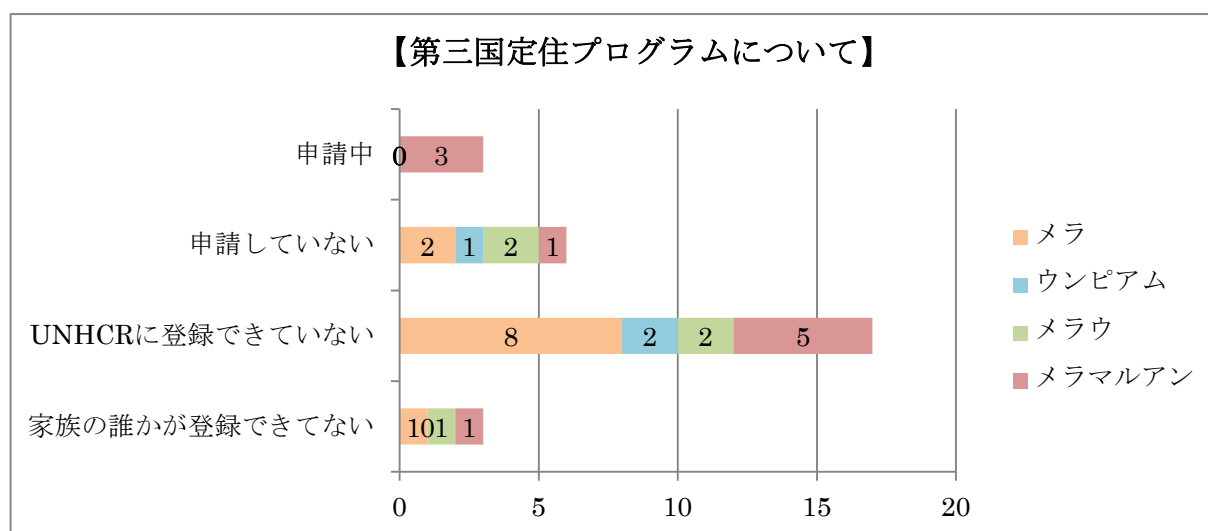
〈見解①〉

やはり、多く的人是は“いつかは自分の故郷に帰りたい”という思いを持っているようであった。しかし、将来はビルマに帰って私が国を変えるんだと語ってくれる少年や、カレンの地を取り戻したいと語ってくれる老教師がいる一方で、大多数は、帰国は現実的な将来と

いうよりも、あくまでそういった思いは捨てられないが、いまはキャンプでの生活が第一でそこに目が向けられている、といった印象であった。そして“ビルマをよく知らない”という回答について、メラウキャンプでの調査の際、通訳してくれた私と同年である青年は「3歳になる頃にはすでにキャンプにいた。僕もビルマのことについて知りたいんだ。」と話してくれた。彼らにとって、ビルマという国という国は、もはや祖国とは言えないのかもしれない。難民キャンプは、すでに彼らの home の一つなのである。このような状況の中で、自民族の言語などの文化やその文化に対する誇りを保ち継承していくことは、これからますます困難になるかもしれない。そこで、SVA の行う絵本のカレン語やビルマ語への翻訳、出版、難民子ども文化祭などの取り組みが重要となる他、自分の国、もしくは両親の育ったビルマという国についての事実を学び、自分は将来どのように進んでいきたいのかを考える教育機会も必要であろう。

よって、多くの人は帰国への希望を持っているという回答が得られたが、細かく見ていくと、それぞれの経験してきたことなどによっていま何に重きを置くのかは大変異なっており、キャンプ内での帰国に向けての何らかの動きやまとまりというところまで見るには至らなかった。むしろ、現在のキャンプでの生活の中で、十分な食料が供給されていない、家の修理をするための資材が足りないといった側近の問題の解決を求める声が多かった。

(2) 第三国定住プログラムについて
〈インタビュー結果②〉



これは、第三国定住に関して、申請を行っている人と申請を行っていない人（登録ができない人）をまとめたものである。そもそも、この第三国定住プログラムは、まず UNHCR に登録した者でないと、申請を許可されない。しかし、この登録は 2005 年以降行われておらず、第三国定住を希望していても申請すらできないという人が多くいた。さらに、何らかの事情で家族の一人が UNHCR に登録出来ておらず、家族でキャンプに残っているというケースも見られた。一方、第三国定住プログラムに申請中で、面接や健康調査を待つ

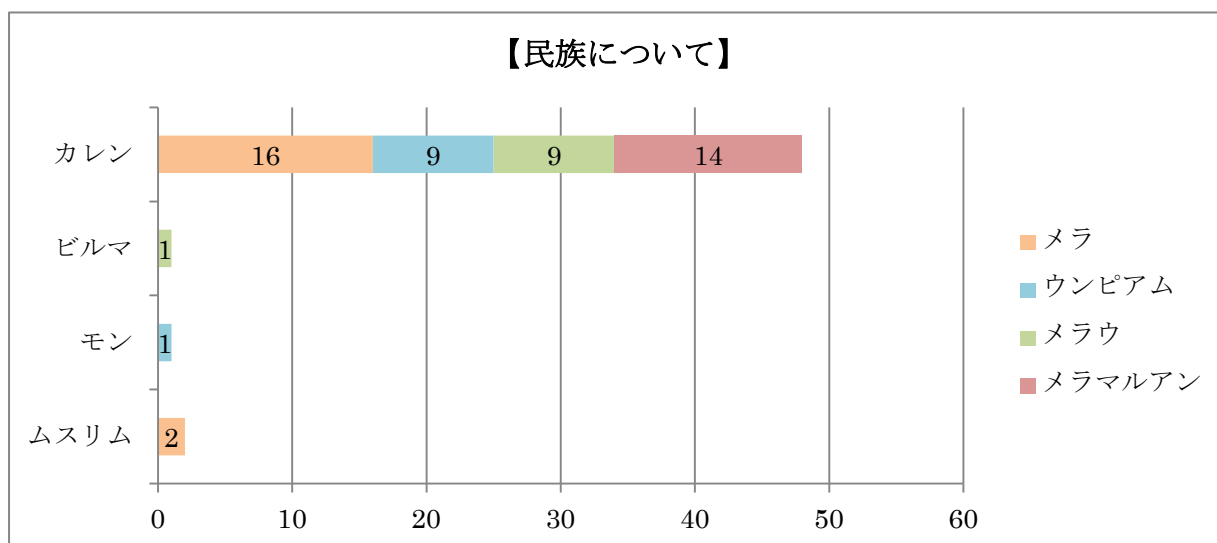
いるという人の他、登録はしているものの全く知らない土地で一から生活を始めるよりはキャンプにいたほうが良いと答えた人もいた。また、高齢のため、いまから新しい国へ移るのは負担が大きという理由でキャンプに残る人もいた。

〈見解②〉

やはり、UNHCR による新規登録が行われていないのは問題であると言える。2004 年以降、第三国定住を希望しキャンプへ逃げ込む人が増加したが、2005 年以降に来た人々は第三国定住プログラムに申請することが出来ない。また、UNHCR への登録が出来ていないがチャンスがあったならば第三国へ行きたいという声がある一方で、登録は済ませているものの、住み慣れた生活様式やキャンプで築いたコミュニティを捨ててわざわざ新しいところへ移り住むことに抵抗を感じる人もいるようである。新しい土地への適応は、確かに大きな負担となるだろう。そして、こうした第三国定住に対する不安を抱いている人の多くは、中高年層以上である傾向が強いと感じた。一方で、幼いころにキャンプへ来た、もしくはキャンプで生まれ育ったという若者からは、こうした不安を訴える声はほとんど聞かれず、むしろ新しい生活に期待いっぱいといった様子であった。このように、世代間のギャップが大きくなってきているようである。もちろん、第三国定住プログラム実施国は、選考を通過した申請者に対して、それぞれの言語や文化、生活様式に慣れるための事前研修などのサポートを実施している。しかし、情報が限られている難民キャンプの中で、申請以前にその国について知識を得る機会はなかなかないだろう。そこで、各国政府がより積極的に受け入れ体制を整えていくことが必要である。若者に対しては、学校などの教育現場において、自文化に触れ、向き合う時間を提供したうえで、新しい可能性へ挑戦できるようにしたらよいのではないかと思う。しかし、ここで再び家族がばらばらになってしまうのを避けるためにも、何より大事なのは家族間での対話であろう。

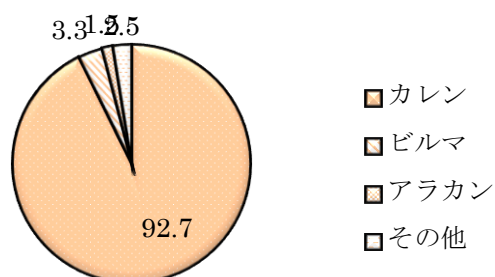
4. 民族の意識について

(1) キャンプでのインタビューから

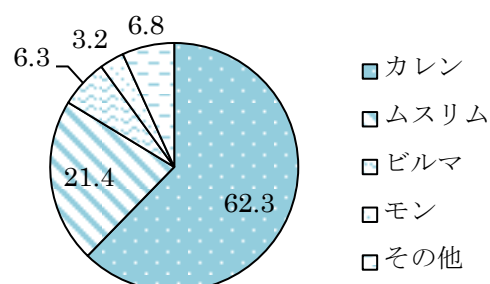


これは、各キャンプ訪問時にインタビューで得た“あなたの属する民族は何か”という問いに対する回答である。4つのキャンプとも、圧倒的に多いのはカレン民族であった。以下は、実際に各キャンプ委員会が把握する民族比¹。

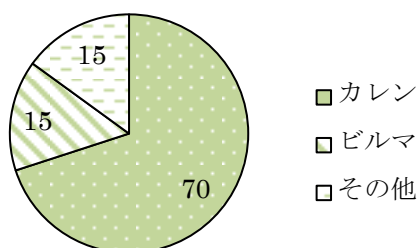
【メラ】



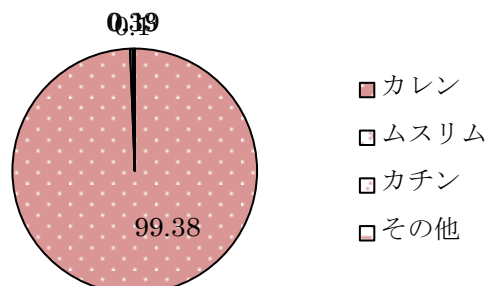
【ウンピナム】



【メラウ】



【メラマルアン】



¹ SVA 難民キャンププロファイル より

民族の意識に対しては、統計を取るほど多くのデータが収集できなかったが、インタビューを通しての印象として、キャンプ内では民族間におけるいさかいや反発感情といったものを感じる場面はなかった。逆に、キャンプで他民族の異性と出会い、結婚をしたという若い夫婦にも出会った。また、“多くの民族が一つの国でともに暮らすためにはどうしたらいいと考えるか”という質問に対して、「教育。それしかない。」と答えてくれた人もいた。

(2) BPHWT でのインタビューから

キャンプでのインタビューの他に、BPHWT (Back Pack Health Worker Team) 訪問の際に民族の意識について興味深い意見をもらうことが出来た。まず、BPHWT とは、ビルマ国内に点在する国内避難民 (IDP : Internally Displaced Persons) に対して医療や保健教育を提供する団体である。バックパックに必要物資を詰め込み、川を渡りジャングルを歩き、平均 2 週間ほどかけてターゲットとなる各村へ行くことからその名前がついている。

このチームは、20 もの地域をそのターゲットとして設定しており、その地域における民族としては、カレン、カヤー、カヤン、シャン、ラフ、アラカン、カチンなどがあり、医療の整わない環境の中で病気の人や、ビルマ国軍などによる暴力でけがを負った人々に分け隔てない治療を施している。また、保健教育や選ばれた村民に対して医療トレーニングも行う²。これだけの民族をターゲットとしているということで、やはりまず言葉の問題が生じる。言葉が通じなくては、治療一つするにも大変である。そのため、基本的にはターゲットと同じ民族であるスタッフがその地域の担当となる。しかし、それでは対応しきれない地域もあるため、言語のトレーニングによりその問題をカバーしているという。また、言葉以外にも、いつ誰が自分の村を襲撃してくるか分からないという状況に置かれる国内避難民にとって、チームとの信頼関係は最も重要だと言えるかもしれない。チームのメンバーの一人は、「現在はすでに良い関係が築けているので大丈夫だ」と話してくれたが、やはり、国内避難民として生きることを強いられる人々にとって自民族についての理解のある者だからこそ心許せる部分があるのではないだろうか。

また、ビルマ国内の変革について聞いてみると、「たとえ民主的なシステムが確立されたとしても、そこには民族の多様性という課題が残る。日本にも少数の民族がいるが、ビルマには 130 以上もの民族がいるのだ。」との答えが返ってきた。確かに、これほどの民族が同じ国家の中に存在していて、自分の身近に違う民族が暮らしている、という状況は私に想像し得るのだろうかと考え込んでしまった。感覚として感じるのは、ほぼ不可能だろう。そこで、より深く民族間関係やそれぞれの歩んだ歴史的背景を学ぶ必要性を強く感じた。

² BPHWT “2010 Mid Year Report”

5. おわりに

1ヶ月という限られた期間の中で、主に難民キャンプの訪問を通して上記のような調査結果が得られた。これで、当初抱いていたもやもやとした気持ちは晴れてすがすがしい心地になるのかと思いきや、正直なところ、また新たなもやもやが生まれていた。というのも、まず難民キャンプにもいろいろな人がいる。例えば、多様な民族であり、難民キャンプへ追われた背景もそれぞれ違っている。メーソットにはビルマから来た人々が難民としてではなく、移民という選択をして暮らしている。NGO ワーカーとして難民、移民の支援をする人々がいる。記者やジャーナリスト、在日ビルマ人という見方がある。たった1ヶ月という間に、本当に多くの場所を訪問し、多くの人と出会い、言葉を交わす機会を頂いた。それらはすべて、ビルマという国から広がった出会いであった。つまりビルマの周辺には、多くの事象が取り巻き、そのそれぞれに多くの捉え方が存在していたのである。お世話になった SVA ビルマ難民事業事務所所長の小野さんがよく言っていた言葉を借りれば、まさに一言“多様性”であった。よって私は、それまで見えていなかった新しい課題や視点に出会う度に、「ああ、こんな側面もあったのか。こんな捉え方もあるのか。」と感じるとともに、「では、私ならどう考えて、どう行動するべきなのか。」という問いを幾度となく課せられることになった。そこで、どんどん深い迷路に迷い込んだような心地になってしまっていた。しかし、落ち着いて考えてみると、私は、記者やジャーナリスト、NGO ワーカーになれる可能性が0%ではないにしても、どんな努力をしたとしても、ビルマ人にもカレン人にもタイ人にもその他少数民族にもなることもできない。この1ヶ月で出会ったある人から「あなたは第三者だからこそ、客観的な目で見ることが出来るのですよ。」という言葉を受けた。そこで私は、自身が“第三者”であるということ認識することによって、客観的な視点が得られることに、やっと気が付くことが出来た。

私は、研修中“寄り添う”という言葉も大事にしてきた。今年、日本で起きた東日本大震災以降、その“寄り添う”ということの困難さを実感していたからである。やはり、“寄り添う”ということは簡単ではないと思う。どんなに努力をしても、当事者には慣れないし、感情を分け合うこともできない。しかし、困難であるがゆえに、また困難であることを理解したうえで、寄り添う努力を続けていくことに意味があるのだと思う。

当初の私にとってみれば、自分が“第三者”と言ってしまうのは、無責任というか、一歩引いたネガティブな視点で見ることに感じていた。しかし、やはり私は当事者にはなれないのである。つまり“第三者”と認めることは、私の考えていた“寄り添う”ということに通じているのではないか。私という“第三者”の視点を持つことで、やっと寄り添おうとすることが可能になるのである。

私はこれからも、難民キャンプに限らず、ビルマという国を取り巻く課題と人々に関わり続けていきたいと考えている。どのような職業に就くにせよ、“第三者”であることには変わらない。これまで以上に多様な声に耳を傾けつつ、今回の研修を通して得られた新たな視点を持って、向き合っていきたいと考える。

*最後の最後に

今回の研修に際して多くのサポートをいただいた、SVA 東京事務所の中原さん、鈴木さん、ビルマ難民支援事務所の小野さん、礼乃さん、ナショナルスタッフのみなさん、研修生のマミちゃん、そのほかメッセージでお会いしたすべての人に感謝しています。本当にありがとうございました！そして、これからもよろしくお願いします。次会えることを楽しみにしています。